

日本学術会議の問題から

政府による日本学術会議の任命拒否問題が大きな波紋を呼んでいる。本稿ではこの問題そのものには触れないが、気になるのは任命拒否された6名がいずれも人文社会学系の研究者であることだ。日本学術会議は三部構成で成り立っている。第一部は人文・社会学、第二部は生命科学、第三部は理学・工学である。同会議のホームページを見れば、第一部にのみ説明文が付いているが、第二部、第三部は何にもない。これは、第二部・第三部において学問の内容は自明であり、わざわざ説明の必要がないが、第一部は必ずしもそうではないからであろう。この点が一般の人々には分かりにくく、今般の任命拒否問題についても一知半解の意見が横行する原因となっているように思われる。

例えば、物理学や臨床医学においては、「物理学とは何を扱うか」とか、「臨床医学とはいかなる学問か」とかは、あえて問うまでもない。それは自明なことだからだ。ところが、人文社会学系の学問には、いずれも自らの学問そのもののあり方を問う契機が含まれ、個々の研究者による学問的個性によって、同じ学問分野でもさまざまな見解や理論が導き出されるところがある。しかし、そのことが人文社会学系の学問の長所となり得るのである。学問の性格やスタイルの違いをきちんと理解していないと、研究者の見解や理論の言葉尻を捉えて揚げ足取りをするばかりになってしまうだろう。

研究者・学者・知識人

ところで、人文社会学系の学問の中でも、とくに人文学 humanities と呼ばれる領域にはまた独自のものがある。時に人文科学 human sciences と言い換えられることがあるとはいえ、人文学は学問 studies ではあるが、いわゆる科学 sciences ではない。哲学がその典型である。哲学という学問そのものの中に、「哲学とは何か」という問題提起が構造的に組み込まれている。この契機があるがゆえに哲学は主体的な学問たり得る。「哲学とは何か」と問わない哲学、「哲学する私は何者なのか」と問わない哲学は、真正の哲学とはいえない。

しかし、アカデミズムにおいて哲学はあくまで哲学研究という形を取る。そこではこうした自己遡求的な問いは免除される。研究において重要なのは何よりも研究業績の発表とその蓄積だからだ。どんなに主体的に哲学の営みをしていても、学術論文がなければアカデミズムの仲間入りはできない。哲学者であっても、学術論文どころか著作が何もないソクラテスは最初から論外となる。文学作品やアフォリズムの形式で思想を説いたニーチェは自らアカデミズムの世界から降りてしまった。

アカデミズムの中で学問に携わる人は、学者と呼ぶよりむしろ研究者と呼んだほうがその性格が明らかになる。研究者は専門研究のエキスパートである。学者というのは、豊かな学識をもった人物（学識経験者）のことだ。研究者とも重なる部分もあるが、学者とはアカデミズムと別個に成り立つ人格の価値類型である。

知識人はまたこれらとは違う。知識人とは、狭義の学問そのものを超えて独自の知識を持ち、自らの思想を語れる者のことであ

る。研究者であり学者であり、かつ知識人である人間もいるかもしれない。しかし、研究者・学者・知識人は、それぞれ独立して“学問行路の諸段階”をなすところの人格類型なのである。

知識人の中には、サルトルのようにアカデミズムに全く席を持たず、在野の人間として草の根レベルで自らの思想を語る者も少なからず存在する。彼は第2次世界大戦後のフランスで、政府が無視できないくらいの批判勢力を結集することができた。だが一般的に言えば、思想が独創的であればあるほど、その思想は同時代人の多くから異端視される傾向がある。独創的な思想が人々に理解され、影響力を発揮できるようになるまで、しばしば時間がかかり、時に何世代もかかることすらある。

反=知識人としての思想家

けれども、同時代人に知的影響力を及ぼさない知識人がいたとして、そのような人物は果たして知識人と言えるのだろうか。そもそもそれは知識人という言葉の定義に矛盾しているのではないだろうか。ソクラテスの場合で考えてみよう。彼は知的問答を通じて同時代人に大きな知的影響力を与えた。しかし、彼は自ら「無知の知」を標榜し、「知を愛する者」として、同時代の「知識人」たちにどこまでも対峙した。その意味で、彼は反=知識人として振舞ったのである。彼は同時代において多くの敵を作り、裁判にかけられて、最後は毒盃を仰いで死んだ。だが、彼の知的問答はプラトンの対話編の中で蘇り、二千数百年の時空を超えて人類に大きな影響を与え続けている。彼は同時代においては反=知識人であったが、人類史においては永遠の知識人であった。この逆説に満ちたソクラテスをひそかに敬仰していたのが、実はキルケゴールその人である。

では、キルケゴールがもし21世紀の現代日本に生きていて、我々の同時代人だとしたらどうだろう。彼はどこにいるだろうか。彼はそもそもアカデミズムに所属していない。著書はたくさんあるが、思想書とも文芸作品ともつかぬものばかりである。註がたくさん付いた学術論文は一つもない。彼はだから研究者ではない。彼は人生に対する含蓄深い考察を数多く行っている。だが、そこに豊かな学識が披露されているかということ、それは極めて限定されたものだ。彼はそれゆえ学者（学識経験者）とも言えない。だとすれば、彼は一個の自由な知識人であり、在野の思想家となろう。しかし、その知識人としてのあり方は、ソクラテスと同様に逆説的な性格のものなのである。

歴史上のキルケゴールは、在世当時はデンマークのローカルな一著作家に過ぎず、死後も人々から忘れられた状態が続いた。彼は20世紀に入って、ようやく実存思想の先駆者として再発見され、アカデミズムのみならず知的な読者層にも広範に影響を与えるようになった。彼の思想は、時代を超えて我々一人ひとりに語り掛ける。そして我々は、彼の語り掛けを自らの内で弁証法的に共鳴させることで、自己はより自己自身の自覚を深め、より精神的に自立した一個の人間となる。それによって、我々は自らの置かれた場や状況の中で、自由人として発言したり活動したりすることができるようになる。思想が影響力を持つというのは、こういうことを指すのではないだろうか。